友だちとのかかわり合いを重視した授業づくりを基盤とする学級経営のあり方

高知市立鏡小学校　　教諭　　池田　勝

学級経営において、お互いを認め合う学級づくりをすることはとても重要である。
そこで、学校生活の中で児童が共有する時間が最も多い授業で、児童が自ら友だちのよさを見つけ、伝え合っていくように友だちとかかわり合える学習活動を仕組んでいくことで、お互いを認め合うことができるようになると考え、研究を進めてきた。
友だちのよさを伝え合う場、時間を保障し、メッセージカード等を利用することにより、検証授業後、子どもたちは友だちから認められているという認識をもつようになった。一人一人が「学級は安心して過ごすことができる場所である」と感じるようになったことから、学級の支持的風土が高まった。
キーワード：学級経営、かかわり合い、よさを伝え合う、支持的風土

1　はじめに

平成 11 年 5 月告示、平成 16 年 3 月一部補訂「小学校学習指導要領解説　総則編」によると、学級経営と生徒指導を充実することについて、「日ごろから学級経営の充実を図り、教師と児童の信頼関係及び児童相互の好ましい人間関係を育てるとともに児童理解を深め、生徒指導の充実を図ること」と示されている。さらに、「学級を一人一人の児童にとって存在感のある自己実現の場としてつくりあげることが大切である。すなわち、相手の身になって考え、相手のよさを見つけようと努める学級、お互いに協力し合い、自分の力を学級全体のために役立てようとする学級、言い換えれば、児童相互の好ましい人間関係を育てていく上で、学級の風土を支持的な風土につくり変えていくことが大切である」と述べている。

一方、子どもたちの現状と課題として挙げられている 1980 年代半ばから深刻化してきた不登校やいじめなどの問題、1997 年にマスコミに取り上げられて社会問題となった学級崩壊という問題の背景には、子どもたちの人間関係の問題がある。現代の子どもたちは、学級という集団の枠に対して人間関係をうまく形成・維持できない、過度に不安や緊張が高くなってしまう、また、ストレスを適切に処理できないなどの傾向が見られる。そしてこれらの傾向は、人間関係を避けること、逆に攻撃的になってしまうなどの行動や態度として表面化することがある。その結果、子どもたちが集まり、ともに活動し、生活する学級で、人間関係に起因した様々なトラブルが発生しているのである。教室は子どもたちにとって、とてもストレスがたまりやすい場所になっているのである。

図１　研究構想図

学校生活の中で子どもたち同士、あるいは

子どもたちと教師が共有する時間が最も多いのは授業である。つまり、学級経営の充実を図る上で、授業が基盤となっていることは確かである。子どもたちが好ましい人間関係を築いていけるような学級経営をしていくためには、教師が授業を充実させ、その中で自他共に新たな一面に出会い、認め合うことができるような場面を設定することが必要ではないだろうかと考え、本研究のテーマを設定した。

2　研究目的

授業において友だちとかかわり合える場面を意図的に設定し、重視することにより、子どもたちは自分や友だちのよさに気付き、認め合うことができるようになり、学級集団としても高まるであろうという仮説を検証していく。

3　研究内容

(1)　基礎研究

①　集団を高める学級経営（支持的風土）について

「小学校学習指導要領解説　総則編」にある「学級の風土を支持的な風土につくり変えていくことが大切である」という一文より、支持的風土についてまとめてみた。片岡徳雄(1976)によると、支持的風土とは仲間との間に自信と信頼が見られ、目標追究に対して自発性が尊重されることなどを特徴とする、協力的かつ創造的な成長集団の雰囲気を表すものである。このことから、支持的風土のある学級をまとめると、学級の一人一人が以下のような状態であることと考える。

・友だちの立場になって考える、友だちへの思いやり
・友だちの考えや行動の中に、長所を探していく
・友だちのまちがいを責めたりばかにしたりしない

このような態度をもつことによって、お互いが信頼関係で結ばれ、自分に対して自信がつき、学級の活動に対しても積極的に参加する雰囲気がある学級であると考える。

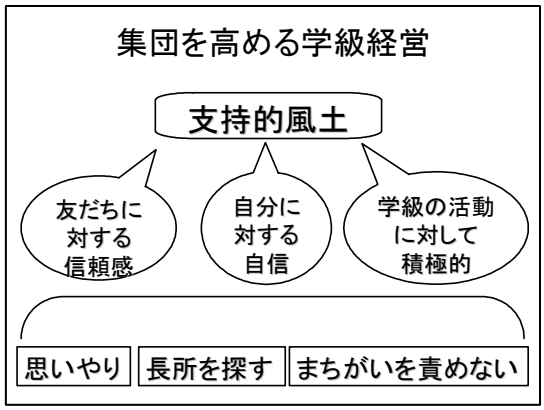


図２　支持的風土

②　かかわり合いについて

先行研究や文献より「かかわり合い」とは、学習する児童が、その学習を進めていく上でかかわりをもつすべてのものとの関連を指している事例が多く見られた。例えば自分と教師、友だち、教材、学習環境、地域、そして自分自身とのかかわり合いである。

しかし本研究では、子どもたちの現状と課題から、学習する仲間、つまり学級の「友だちとのかかわり合い」を中心に据える。

さらに、「友だちとのかかわり合いのある授業」について、京都府総合教育センター(平成 15 年 3 月)を参考にして、以下のように考える。

友だちとかかわり合いのある授業とは
・友だちとかかわり合うことを通して、自分の考えが深まったり、新しい気づきが生まれたりするなど、児童が自分自身の高まりを実感できる。 ・友だちとかかわり合うことで、友だちのよさを認め、自分のよさに気付くことができる。

このような授業を行っていくための指導形態等の方法として、以下のような例が挙げられる。

・ペア学習、グループ学習	・話し合いや討論
・友だちと協力して調査、研究	・調べたことを共同でまとめる、発表するなど

③　構成的グループ・エンカウンターについて

国分康孝氏によると、エンカウンターとは、ホンネとホンネの交流や感情交流ができるような親密な人間関係（体験）をいう。特にリーダーの指示によって行うエクササイズを通して、集団でエンカウンターを体験することを構成的グループ・エンカウンターという。

本研究における構成的グループ・エンカウンターでは、友だちとかかわり合う中で自分や友だちのよさに気付き、認め合うことができ、そのよさを伝え合う体験を位置付ける。今回は下の３つの構成的グループ・エンカウンターを行うことで、自己理解、他者理解を深めていくことにした。

なお、構成的グループ・エンカウンターの人間関係づくりの内容が、「特別活動」の学級活動(2)の中にある、望ましい人間関係の育成の項目の内容と重なる部分があり、構成的グループ・エンカウンターを特別活動の授業で行なうこととした。（表１）

表１　構成的グループ・エンカウンター活動内容

エクササイズ名	活　動　内　容
こんな友だちだったらいいな	話し合いでお互いの考えを否定せずに、違いを認め合い、よさを見つけていく活動
私の四面鏡	友だちのよさについて選択肢から選んでいく活動
Ｘからの手紙	お互いのよさについて書いたメッセージをもらう活動

④　国語科における「友だちとかかわり合いのある授業」について

国語科の内容では「話すこと・聞くこと」「書くこと」「読むこと」があり、いずれも相手が必要な活動である。相手とのやりとりの中で、心のつながりを含めた相互のかかわり合いが重要になってくる。つまり、常に誰かを相手に活動しているかを意識することである。話すときや読むときは聞き手を意識し、聞くときは話し手や読み手を意識することが大切である。そのためには、相手と自分の考えを伝え合う学習活動を仕組んだり、共に問題解決せざるを得ないような場面設定にしたりすることが必要である。

その中で、自分一人では思いもつかなかった考えを聞くことにより、刺激を受け、新しい気付きや発見をし、相手のよさを認めていくこともあると考える。

このように考えると、上の構成的グループ・エンカウンターでの体験を国語科の中でも位置付けることにより、研究テーマである「友だちとのかかわり合いを重視した授業づくり」が教科（国語科）と連動してできると考える。

(2)　実践研究

①　授業構成（図３）

自分や友だちのよさに気付き、伝え合う方法に対して「出会う」「つかむ」「追究する」「ふり返る」の４つの展開を考えた。（表２）

まず「出会う」場面では、「友だちのよい面に着目していく活動（特別活動）」をする中で、今まで自分では思ってもいなかった何気ない言葉が、相手にはうれしい言葉であったり、逆に自分にとってもうれしい言葉であったということに気付くようになったり、よさを認められてうれしい気持ちになることを体験した。

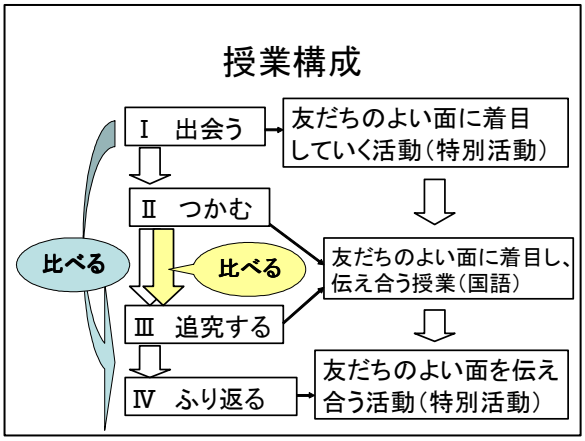


図３　授業構成

次の「つかむ」場面では、国語の授業の中で「友だちのよい面に着目する活動」同様の支援をしたり、同様のメッセージカードを使ったりして、友だちのよい面に着目できるようにした。

「追及する」場面では、教師が意識して声がけをしなくても、自分たちで友だちのよさを見つけたり、新たなメッセージカードを使ったりして、自分の言葉で伝えることができるようにした。同じく国語科で行い、「つかむ」場面との児童の変容を見るようにした。

最後の「ふり返る」場面（特別活動）では、授業や学校生活などをふり返り、友だちのよい面をメッセージに書いて相手に伝えるようにした。最初の「出会う」場面と比べて、どのくらい友だちのよい面に着目できているかを見るようにした。

表２　指導の流れ一覧表

	授　業	ね　ら　い	学　習　活　動
出会う	Ⅰ　特別活動 「こんな友だちだったらいいな」	自分が友だち関係を作っていくときに大切に思うことを考えるとともに、友だちの考えも知り、よりよい友だち関係を作っていけるようにする。	自分にとってよい友だちの条件として大切だと思うことを考え、グループで話し合い、意見をまとめていく。
	Ⅱ　特別活動 「私の四面鏡１」	グループの一人一人がもつ魅力的なところを見つけ、伝え合うことによって、友だちを肯定的に思いやる心情を育てる。	グループの人に対して印象的なイメージを一覧表から選んで伝え合う。
つかむ	Ⅲ　国語 「心の目を開いて」	自分が好きな詩を選び、いいなと思ったところを意欲的に伝えることができる。	「のはらうた」の詩を読み、いいなと思ったところについて感想を伝え合う。
	Ⅳ　国語 「心の目を開いて」	詩の発表会を行い、感想や意見を伝え合う。	「のはらうた」をもとにして作った詩の発表会をする。
	Ⅴ　特別活動 「私の四面鏡２」	これまでの授業を通して友だちの肯定的な面をふり返り、以前とはちがったよさを見つけ、伝え合うことによって、友だちを肯定的に思いやる心情を育てる。	これまでの授業の中で見られた、新たな友だちのよさについての項目を付け加えた一覧表から選んで伝え合う。
追究する	Ⅵ　国語 「心の目を開いて」	自分が好きな詩を選び、いいなと思ったところを意欲的に伝えることができる。	日常の生活をもとにした詩を読み、いいなと思ったところについて感想を伝え合う。
	Ⅶ　国語 「心の目を開いて」	詩の発表会を行い、感想や意見を伝え合う。	日常の生活をもとにして作った詩の発表会をする。
ふり返る	Ⅷ　特別活動 「Ｘからの手紙」	友だちのよい点を探し、その人に伝えることで思いやりの心を育てるとともに、自分も友だちからよい点を言ってもらうことを通して、自尊感情を高めていく。	授業や学校生活をふり返り、友だちのよい点やがんばっていたところについて手紙を書いて、伝え合う。

②　具体的な手立て

ア　評価規準の作成（表３、表４）

検証授業では「特別活動」と「国語科」の評価規準に、研究テーマである「かかわり合い」についての評価規準を加えた。（一部抜粋）

表３　特別活動の評価規準

特別活動評価規準

※は研究テーマにかかわる評価規準を表す。

活動内容	評価観点				具体の評価規準（評価方法）
	関	思	表	知	
「こんな友だちだったらいいな」の活動をする。	○				・自らすすんで活動に参加しようとする。【関】（観察） **※活動の中で自分や友だちのがんばったところを見つけることができる。（ワークシート・ふり返りカード）**

表４　国語科の評価規準

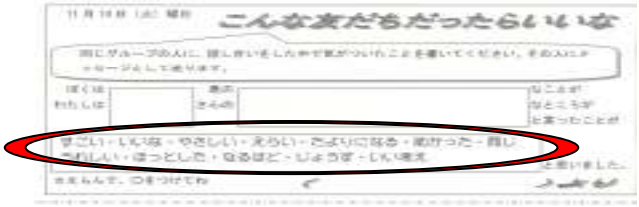
国語科評価規準

※は研究テーマにかかわる評価規準を表す。

活動内容	評価観点			具体の評価規準（評価方法）
	関心	話聞	言語	
「のはらうた」の詩を読み、いいなと思ったところについて感想を伝え合う。	○		○	・「のはらうた」の詩を読み、自分が好きな詩を選び、いいなと思った部分を見つけて紹介しようとする。【関心】（ワークシート） ・人物の気持ちや場面の様子が伝わるように音読を工夫している。【言語】（発表） **※友だちの選んだ詩を聞いて、詩の中でいいなと思った部分や、読み方でよかったところを伝え合おうとしている。（発表・態度・ワークシート）**

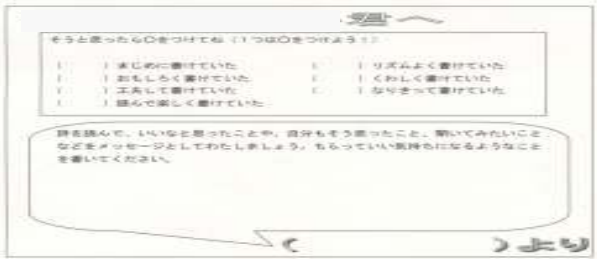
イ　メッセージカード作成

全部で８回ある検証授業のうち、前半の４回は資料１のメッセージカードを使用した。友だちの言動に対してのよさや、共感できるものを見つけやすいように、言葉を選べるようにした。それに対して、後半は資料２～４のように、自分の言葉ですべて書くようにした。自分の言葉でどのくらい詳しく書けるようになったか、児童の変容に着目した。



資料１　メッセージカード①

資料２　メッセージカード②



資料３　メッセージカード③

資料４　メッセージカード④

ウ　メッセージカードの保存

友だちからもらったメッセージカードをファイルに綴じて保存していくようにした。自分が認められ、ほめられたメッセージカードを見返すことにより、改めて自分のよさに気付くのではないかと考えた。

エ　ふり返りカード（資料５）の作成

ふり返りカードは、友だちが自分のよさについて発表したことを改めてふり返ることによって、うれしさや認められたことを再認識できるようにした。また、友だちから言われてうれしかった言葉をまとめて、教室に張り出した。

オ　話合いのマニュアル（資料６）、友だちのよさについての着目点一覧表（資料７）作成

話合いがスムーズに進行できるように、話合いの進め方のマニュアルを作った。また、友だちのどんな言動に着目していけばよいのかについても同様に作った。

資料５　ふり返りカード

資料６　話合いのマニュアル

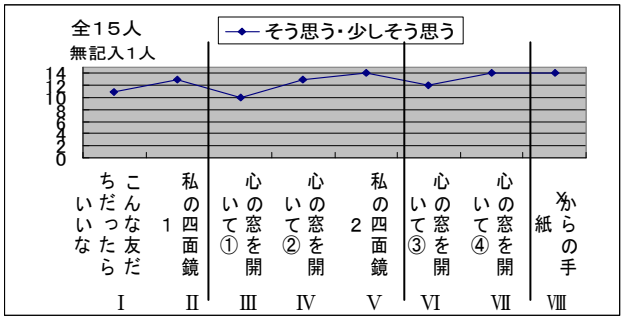
資料７　よさの着目点一覧表

③　検証授業の考察

ア　授業後のふり返りカードより

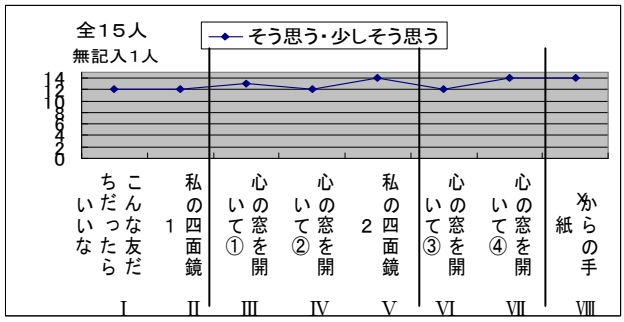
検証授業後のふり返りカードの自己評価より、友だちのよさを伝え合うことについて分析した。

自分は友だちのいいところややさしいところ、がんばりを見つけて、伝えることができた。



グラフ１　友だちのよさを伝えるふり返り

友だちは自分のいいところややさしいところ、がんばりを見つけて、教えてくれた。



グラフ２　自分のよさを言ってもらうふり返り

検証授業Ⅰ・Ⅱの「出会う」場面では、前述の友だちのよさを見つけて、伝え合うことができるように、友だちのよさについての着目点(資料６)や話合いのマニュアル(資料７)を使って授業を進めていった。また、メッセージカードには、友だちの言動に対してのよさや、共感できる言葉を選択(資料１)できるようにした。その結果、児童は友だちのよさを見つけて、伝え合う一定のパターンを身に付けることができるようになった。

「つかむ」場面の第１時間目である検証授業Ⅲでは、２つのグラフ（グラフ１、グラフ２）の結果が異なっている。友だちのよさを伝える(グラフ１)では、前回に比べて数値が下がっている。これは、授業が教科（国語）の内容になり、よさを見つけにくかったり、言い表すことが難しかったりしたのではないだろうかと考える。一方、自分のよさを教えてくれる(グラフ２)については、逆に数値が上がっている。これは、児童の意識の中で、教科（国語）の内容では今までよさを言われた経験が少なく、Ⅲの授業ではよさを教えてもらったことが新鮮に感じたのではないかと考える。

検証授業Ⅴでは、どちらも数値が上がっている。これは、メッセージを自由記述にしたことによって、友だちのよさをより詳しく書くことができたことと、対象をグループからクラス全員にしたことによって、自分の詩についてクラス全員から認めてもらったことを実感しているのではないだろうかと考える。

以上のことから「つかむ」場面では、友だちのよさを伝えることに慣れてきて、よさを伝え

る語彙も増えたことがわかる。また、少人数なので全員と交流することが効果的であると考える。

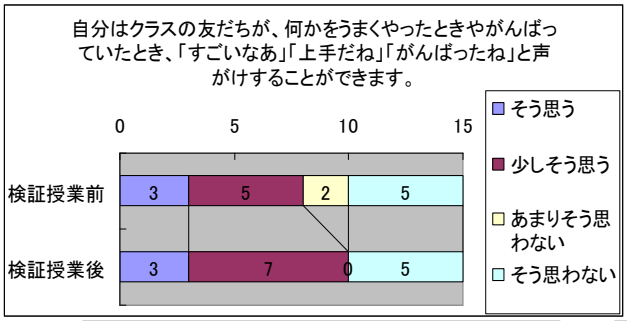
「追究する」場面の検証授業Ⅵでは、前回に比べて両方とも数値が下がっている。これは、メッセージカードの書き方のパターンを固定化(資料２)したことによって、児童は自由記述と比べて書きにくいと感じ、自分の思いを上手に書くことができなかったのではないかと考える。また、児童はクラス全員からメッセージをもらわないと、よさを伝え合うことにはならないという思いが出始めてきたのではないかと考える。

これは教師が予想していた以上に、児童のよさを伝え合うことに対する意識が高くなっている結果だと判断した。このことから、授業計画と児童の実態にずれが生じたことがわかったので、以後のⅦとⅧの授業について授業内容の修正をし、クラス全員からメッセージをもらうようにした。そうすると、Ⅶの授業ではグラフの数値も前回に比べて上がった。

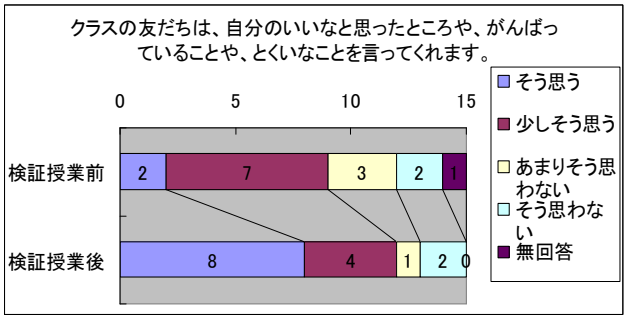
検証授業Ⅷの「振り返る」場面では、Ⅶの授業と同様にメッセージカードの内容を自由記述にして書くこと(資料４)によって、児童は友だちのよさを伝え合うことができたと感じていることがグラフからも読み取れる。

イ　検証授業事前、事後アンケートより、児童の意識の比較

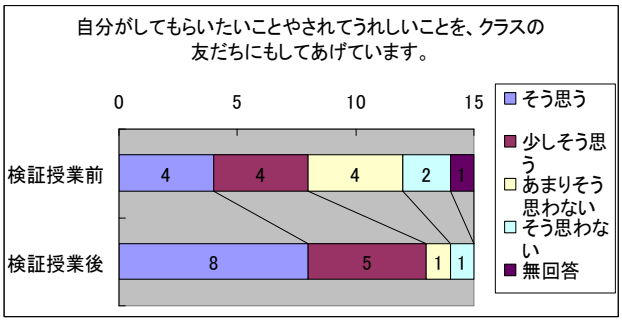
アンケート質問 25 項目のうち、研究仮説と関連する「友だちのよさを伝える」（グラフ３）「友だちから自分のよさを言ってもらう」（グラフ４）「行動の変容」（グラフ５）「学級集団としての高まり」（グラフ６）について、検証授業前と検証授業後の児童の意識の比較をした。



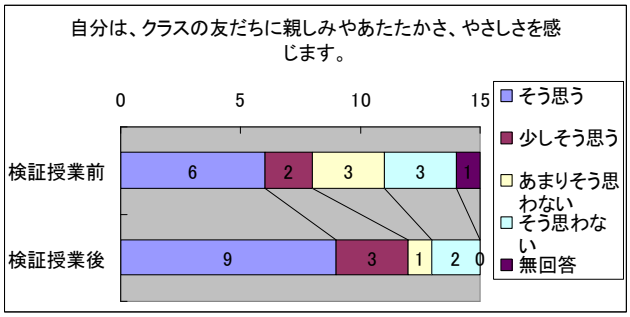
グラフ３　友だちのよさを伝える



グラフ４　友だちから自分のよさを言ってもらう



グラフ５　行動の変容



グラフ６　学級集団としての高まり

グラフのデーターより、どの質問内容においても「そう思う」や「少しそう思う」の肯定的内容の方が数値が高くなっていることがわかる。これらの結果から、友だちのよさを伝え合うことによって、自分や友だちのよさに気付き、認め合い、そして学級集団としても高まるような行動の変容が見られたと考えられる。

グラフ３とグラフ５について、検証授業後「あまりそうでない」「そうでない」と答えた児童を考察すると、2 つの傾向に分けられる。友だちに対して本当にできていない児童と、周りの児童から見ると十分できているのだが、自分自身はまだまだできていないと感じている児童で

ある。また、グラフ４についても同様に２つの傾向に分けられる。クラスの友だちが本当に言ってくれていない児童と、クラスの友だちはその人のよさについて言っているのだが、言われている本人は、その内容では物足りないと感じている児童である。一人一人の価値観の基準がちがっており、それぞれの児童に対して適切な教師の支援が必要である。

グラフ６で検証授業後「あまりそうでない」「そうでない」と答えた児童については、学級担任も気になっている児童であった。今後も授業をはじめそのほかの時間でも個別に支援していく必要がある。

４　成果と課題

(1)　成果

児童の感想の中に、「みんながぼくをどう思っているかわかったからよかった。」「みんなからみて私はどんな感じなのか聞けてよかった。」「みんながぼくのことを悪い印象で見てくれなかったので、すごくうれしい。」という内容があった。検証授業前は、友だちが自分のことをどう思っているかを気にしていたと思われるが、検証授業後のこれらの感想からは、クラスの友だちから自分のよさを認められていることが認識できたことがわかる。

検証授業において、メッセージカードに友だちのよさを書き、読み合って伝えたことによって、お互いに友だちから認められたことを実感できた。また、自分が思っているよさを言葉にして、書いて相手に伝えることによって再認識できる。言葉によって自分自身の思いと友だちがつながっていく。こういうことが「かかわり合い」ではないだろうか。

その結果、児童にとって学級が安心して過ごすことができる場所になっていることから、学級の支持的風土が高まってきたのではないかと考える。

(2)　課題

今回の研究では、構成的グループ・エンカウンターで友だちのよさを伝え合う体験をした後、国語科でも同様の手法を使って友だちのよさを伝え合う授業を行った。今後は国語科だけでなく、他教科でも同様に友だちのよさを伝え合うことができる授業や活動を考えていく必要がある。

友だちとかかわり合いのある授業のうち、友だちのよさを認め、自分のよさに気付くことのできる授業については検証することができたが、児童が自分自身の高まりを実感できる授業については、さらに検証を深める必要がある。自分自身の高まりとは、学習内容、教科の目標に対しても自分の考えが深まることや、自分では考えつかなかった新しい気付きが生まれることも考えられる。友だちとかかわり合う中で、自分自身が高まりを実感できるような授業を目指し、そのための教材、学習活動等を考え、実践していく必要がある。

さらに、話し合いの仕方について２つの課題がある。まず、自分の思いを理由付けて伝え合えるようにすることである。もう一つは、友だちのよさだけでなく、なおしたらいいところやアドバイスも本音で伝え合えるようにすることである。これらのことができるように教師が支援していくことが必要である。以上のことができるようになってきたら、学級集団としても更に高まっていくであろうと考える。

〈主な引用・参考文献〉

河村茂雄　藤村一夫　粕谷貴志　武蔵由佳　ＮＰＯ日本教育カウンセラー協会・企画編集(2004)『学級経営スーパーバイズ・ガイド』図書文化
片岡徳雄・編著(1976)『個を生かす集団づくり』黎明書房
片岡徳雄・編著(1981)『全員参加の学級づくりハンドブック』黎明書房
奥田真史　河野重男・監修(1993)『現代学校教育大事典』ぎょうせい
京都府総合教育センター(2003)『自己コントロールする力が育ち、自己肯定感が実感できる学習の在り方　第３集』
国分康孝・監修(1997)『エンカウンターで学校が変わる Part2 小学校編』図書文化
国分康孝　国分久子・総編集(2004)『構成的グループ・エンカウンター事典』図書文化
安達昇・編著(2005)『人と人とを結び、思いやる心を育てる授業』小学館